

目的 この度提示された学習指導要領の概略によると、家庭科は初めて小・中・高等学校を通して、男女とも履修することが義務づけられた。本研究では、小学校家庭科の被服領域について、小学生と大学生を対象に、アンケート調査を行うと同時に被服実習（部分縫い）を行い、その理解度と定着度を比較検討する。

方法 1. アンケート調査 弘前市内の小学生50名（男子23名、女子27名）と本学学生201名（男子84名、女子117名）を対象に、現在用いられている小学校家庭科の教科書に掲載されている被服領域の語彙126項目についてアンケート調査を行った。これらの項目のうち、知識に関する語彙（例えばまち針）については、“知っている”または“知らない”から選択させた。また、知識及び技能に関する語彙（例えば縫いとり）については、前者の選択だけでなく“できる”または“できない”についても選択させた。 2. 被服実習 1と異なる小学生37名（男子20名、女子17名）と大学生124名（男子61名、女子63名）を対象に、縫いとり・まつり縫い及びボタン付けの実習を行った。なお、大学生の実習は124名を3グループに分けて行った。

結果 1. アンケート調査の結果は以下の通りである。①ほぼ全ての項目で、男女とも知識の定着度の方が技術のそれより大となった。②全ての項目で、女子の定着度の方が男子のそれより大となった。 2. 被服実習（部分縫い）の結果は以下の通りである。①全ての実習で、女子の定着度の方が男子のそれより大となり、その傾向は難易度の高いものほど顕著であった。